

## 英語授業に映像作品鑑賞を取り入れる実践の報告と効果の検証

### *Have Your Own Ideas for Writing: English Education with Visual Content*

小川 真理子 *Mariko Ogawa*

(人間発達学部)

#### 【要旨】

本大学の「英語2」(2017年度前期)において、筆者は、文法の基礎学習に筆者の専門である映像作品のコンテンツを取り入れた。ここでは学生は、映画作品の鑑賞を行い、作品に対する自身の感想や考えを英文に書いて表現するという課題に取り組んだ。本稿では、実際に授業で行った取り組みを中心に、その授業内容を検証し、課題を明らかにし、今後の授業の改善に役立てることを目的とする。

#### (1) 授業の目標

授業に映画作品を取り入れることの目的は、第一に、英文を作成する際に、学生が自分の感想や考えを英語を用いて反映させることができる、というものである。同時に、自身の考えを第三者に伝わるように表現するためには、英語は最適な言語のひとつであることを学生自身が認識することが目標である。

授業では、まず、学生が自分自身の考えを持つことが大切となる。映画を題材とすると、個々の学生は鑑賞した作品に対し少なくとも何らかの印象を持つことができる。それらにはマルバツで判定することが可能な、ひとつの正しい答えというものはない。たとえ「つまらない」「わからない」といった内容であっても、何かしら個々人が感想を持つことができる。映画作品を題材とすることの意味は、学生が自分の考えを持つことであり、そのことが可能であるということである。

しかしながら、学生の全般的な英語スキルの習得度を考慮すると、はじめから「英語で考える」ことは困難である。そのため、英語でライティングを行う前に、日本語で感じたことや考えたことを記述するよう指導した。そして、実際に英作文を行うときには、自分で考えた日本語の内容から最も言いたいことを選び出し、それを英語の一文にするよう指導した。一文の英作にとどめたのは、これも学生の英語習得度を考慮したことが理由である。最初の段階として、まずは一文を作ることで、英語の基本構文の習得や、基本的な文法事項の何が分かっていないのかをそれぞれの学生が知る手段となると考えたからである。

また、自分の考えは、第三者に伝わるように表現されなければならない。それは英語という言葉において大事なことであり、そのため、英語における議論の運び方には約束ごとがある。周知のとおり、公の場での話し方もそうであるが、エッセイ・ライティングにおいて主要なまとまりとなるパラグラフ・ライティングでは、書き手は文章のはじめに自身の主要な考えを挙げる(トピック・センテンス)。その後、その主張を論拠づける理由

について述べる（サポーティヴ・センテンス）。最後に、ふたたび自分の主張を繰り返して文章を終える（コンクルーディング・センテンス）。このような文章の組み立て方に従うと、たとえ映画作品に対して「つまらない」「わからない」といった感想を持って、なぜつまらないのか、なぜわからないのか、といった理由を述べなければならない。そのため、学生は鑑賞した作品にもどり、ふたたび内容について考える必要がある。ここで、より深く考えるという思考のプロセスが行われる。

さらに言えば、英語の論じ方は、日本語の思考の流れと逆である。英語は自身の考えが最初に来てその後に理由がくる。しかし、日本語では、ふつう、理由が続いたあとの最後になって、結論となる自分の考えがくる。そのため、多くの学生にとって、自分のもっとも言いたいことそれ自体にたどり着くことが不慣れで難しい。そのため、日本語で考えた内容を振り返り、その中から「最も言いたいこと」を見つけ出し導き出す過程そのものが、自分の考えを深める思考のプロセスとなり、自分の考えを持つという行為へとつながると考えられる。

## (2) 授業の内容

大きな授業の流れは次のとおりである：①基本的な文法事項の学習、②映画作品に関するレクチャー、③映画作品の鑑賞とライティング、④ライティングの添削とクラス内での共有。これらの4つの項目を1サイクルとし学期内で繰り返し行い、不規則ではあるが、英文による批評家の解説の翻訳作業に取り組んだ。

次に、第1回目のサイクルで行った内容について、「③映画作品の鑑賞とライティング」に焦点をあてて具体的に記述する。以下は、実際に学生に配布したプリントからの引用である。

上映作品：

1. 『工場の出口』（リュミエール兄弟、フランス、1895）
2. 『赤ん坊の食事』（リュミエール兄弟、フランス、1895）
3. 『壁の取りこわし』（リュミエール兄弟、フランス、1896）
4. 『ラ・シオタ駅に到着する列車』（リュミエール兄弟、フランス、1897?）
5. 『海の小舟』（リュミエール兄弟、フランス、1895）
6. 『ホーリンウッドのグレーブ・ミルズ』（セーガー・J・ミッチェル & ジェイムズ・ケニヤン、イギリス、1901）

Screening：

1. *Workers Leaving the Factory* (The Lumière brothers, Louis and Auguste, France, 1895)
2. *Baby's Lunch* (The Lumière brothers, Louis and Auguste, France, 1895)

3. *Demolition of a Wall* (The Lumière brothers, Louis and Auguste, France, 1896)
  4. *Arrival of a Train at Ciotat* (The Lumière brothers, Louis and Auguste, France, 1897?)
  5. *Boat Leaving the Port* (The Lumière brothers, France, 1896)
  6. *Grebe Milles, Hollinwood* (Sager J. Mitchell & James Kenyon, England, 1901)
- .....

問い. 上記の作品について、まず日本語で、感じたことや考えたことを書いてください。その次に、その感想の中からあなたの最も言いたいことをひとつ選んで、簡単な英文（一文でいいです）にしてください。作品は、ひとつの作品を選んでも、いくつかの作品でも、もしくは初期の映画全般についても構いません。（参照ワード：初期の映画→ the early cinema/the early films, [リュミエール兄弟が発明した] シネマトグラフ→ the Cinématographe, [エジソンが発明した] キネトスコープ→ the Kinetoscope, the return gaze → “振り返りのまなざし”）

「英語で表現する」という学生の動機づけをできるだけ確実なものとするために、上記の設問にあるとおり、まずは日本語で自分の感じたことや考えたことをどんな内容であっても書き出すように口頭でも強く励ました。必ずしも文章にする必要はなく、文のリストアップや単語だけの書き出しでもいいことを付け加えた。また、英文に取り組む際には、初回の授業で解説した辞書（オンライン辞書を含む）を使用するよう伝えた。参照ワードは、映画に関するレクチャーで解説した内容から、ポイントとなる事柄を選んだ。

### (3) 学生のライティング：内容と考察

ここでは、前章で提示した課題に対する実際の学生のライティングを提示しながら、その内容について考察を行いたい。今回は、42名の学生（月曜日クラス、西キャンパス）が本課題に取り組んだ。まず、第1回目のサイクルとして、作品に対して日本語で十分に考えることができているか、考えた事柄から自分の最も言いたいことを選び出すことができているか、自分の言いたい内容を適切な英語の1文にできているか、の3点に留意した。

総体として、学生は積極的に映画に対して考えをめぐらせ自身の考えを持つことができていた。なかには、映像の特質を踏まえ鋭い考察を反映させた内容や、独自の魅力的なアイデアを展開する学生もいた。また、オリエンテーション時に行ったアンケート調査では英語に対する苦手意識を持つ学生が多かったが、実際には、積極的に英文の作成に取り組む内容のものが多く見られた。以下に、学生の文章を具体的に上げていく。（日本語、英文ともに添削を行う前の学生が記述したままの内容である。添削の内容は [ ] 内

に記述する。)

#### 学生 a.

##### 【日本語での感想】

カットをつなぎあわせたりをしていないから、人の歩く自然な流れやカメラに興味をもつ子供たち、自然な時の流れがみていて面白かった。

##### 【英語で】

The flow of natural time was fun.

[The flow of natural time was interesting.]

この学生は、日本語にある「自然な時の流れ」という表現に自身の考えを集約させており、それを選び出して“the flow of natural time”という英語の表現を用いた。上映した作品のほとんどが、ドラマとは異なる日常の風景を記録した1分程度の初期の映画であることを考えると、学生は日常と時間に視点を置き映画の特質を的確に捉えて表現していると言える。トピック・センテンスとしては、These early films show the flow of natural time. と言い切ってしまうといいが、1回目の課題であるため、そこまでの指導は行わなかった。

次の学生もまた、対象となる作品の特質をよく捉えて英文の作成を試みている。

#### 学生 b.

##### 【日本語での感想】

映画として世にあらわれた初めての作品が、リュミエール兄弟の『工場の出口』である。人が動いているシーンというのは、生きていればあたり前に見るものだが、それが映像になっていて、しかも演出が入っているというのは、当時の人にかかなり大きなインパクトをあたえたのだと思う。

##### 【英語で】

“Workers Leaving the Factory” is the first movie, the first image that the director entered.

[“Workers Leaving the Factory” is the first movie, the first image in which the vision of the director played an important role.]

上記の学生は関係代名詞を適切に使うことができおらず、関係代名詞以下の表現も不適切である。しかしながら、この学生の特徴は、日本語の文章の直訳ではないかたちで、英語での表現を試みている。つまり、自分が何を感じ何を伝えたいかをよく考え把握しており、そのアイデア全体を英文にしようと試みている。そのため、力強いトピック・セン

テンスを導くためのプロセスを適切に経ていると考えられる。

次の2人の学生は、自身のアイデアを英文1文にとどめず、完全ではないがパラグラフ・ライティングの構造に従って記述することを試みている。

学生 c.

【日本語での感想】

「ホーリンウッドのグレーブ・ミルズ」当時の人々の生き生きした姿が印象的だ。カメラの前に集まりだす子ども達と通り過ぎていく大人たちが対照的に描かれている。カメラを見る子どもとスクリーンで見ている私たちの間にも対話が生まれている。

【英語で】

It is impressive that the people of those days were lively. The children gather in front of the camera, and adults passed by the camera are drawn symmetrically. A dialogue will arise between the children in front of camera and us.

[It is impressive that people in those days were so lively. The children gathering in front of the camera and the adults passing by are drawn symmetrically. A dialogue will arise between the children on the screen and the audience like us.]

学生 d. (中国からの留学生)

【日本語での感想】

現代の映画より、はじまりの映画に現れた人々はほとんどが素人でした。だから、演じたことではなかったのに、非常に自然的な表情や動作を表現できました。もともとに映画は人間の生活や活動を記録されたものだと思う。リュミエール兄弟の作品を見た色と音がない作品だけれども、単純的に映像のリアリティと真実感に感動された。

【英語で】

Comparing with the film in 21st century, there were so many amateurs appearing in the film of early period. Because they had no necessary to perform as an actor. They showed their extremely real action and feelings. Film is a way to record our lives and activities with images. Although the works of the Lumière brothers without colour and voice, I have been touched by the works' reality.

[Compared with the films of the 21st century, there were so many real people appearing in the films of this early period. Because they had no predisposition to perform as an actor, they showed their extremely real action and feelings. Film is a way to record our lives and activities with images. Although the works of the Lumière brothers don't have colour and sound, I have been touched by their reality.]

1 回目のライティングにおいて、上記2つのようなエッセイ・ライティングを行うことができた学生は他にひとりいた。これら3人の学生のエッセイは、他の学生と共有するために、日本語と英文とを合わせて翌週の授業でOHCを使用して紹介した。「自分の考えをどのような英文のかたちで伝えることができるか」を具体的に提示する機会であった。しかしながら、完全な英文をいきなり目指すのではなく、段階として、まずは自身の考えを深め中心となるアイデアを選び出すことの大切さを知ってもらうために、前述の学生 a. や学生 b. のものや、英文を書くことができなくても日本語で作品に対する充実した内容を書いた学生のものも同様に紹介した。また、英文法の誤りは個々に添削を行い返却した。

#### (4) 学生のライティング：成果

本章では、学生の成果について具体的に記述していきたい。

まずは、映像作品に対する自身の考えのなかで最も言いたいことを選び出し、英語の1文にすることができているか、である。段階を経て、トピック・センテンスとして成立する力強いアイデアを適切な英文で表現することのできるようになった学生が少なからずいた。それらの学生に共通するのは、毎回の授業において映像作品をよく観察し日本語でのコメントを多く書き、そのような過程を経ながら映画作品全般に対する自身の考えを発展させていたことである。自身の考えを深めることによって、英文を作る際により適切な単語や表現を導き出すことができると考えられる。多くの学生が辞書を積極的に引き、ふさわしい表現を選ぶためにひとつの単語の意味を調べることにとどまらず、それがどのように文の中で用いることができるのかについて、辞書にある例文を積極的に調べることができるようになった。以下に、学生 e. の1回目と2回目の英作文の例を挙げる。

##### 学生 e.

(1 回目) 『壁の取りこわし』の土煙はとても迫力があつた。まるで現代のCG作品のようだった。また逆再生が入ることで、特別なことはしていないのに非現実的な面白い動きが現れていて、観ていて楽しい作品だと思った。

A cloud of the dust was very powerful. It is like contemporary CG.

[In “Demolition of a Wall,” the cloud of dust was a powerful image. It is like contemporary CG.]

(2 回目) ・今観ても十分に楽しめる作品だった。・背景が素晴らしく、アニメーションのような不思議な世界観を味わえた。・映像技術が発達していなくても、簡単な工夫をいくつも使って演出を生み出していた。・声がなくとも誰にでもわかるようなストーリーで、身ぶり手ぶりで表現してくれる。・非現実的なことをいくつも取り入れ、当時の人はとても楽しんで見たのではないだろうか。

The background of “Trip to the Moon” makes enigmatic interpretation of the world.

[The painted scenery of “Trip to the Moon” makes an enigmatic interpretation of the world.

→“Trip to the Moon” gives an enigmatic interpretation of the world to the audience.”]

上記において、学生 e. は、1 回目と 2 回目の両方においてとくに映像表現の技術的な特徴に関心を示している。しかしながら、1 回目の「印象」が中心の内容よりも、2 回目のライティングにおいては、The background of “Trip to the Moon” makes an enigmatic interpretation of the world. といった、より自身の考えを深めた内容を英文に反映させることができている。日本語での感想を読むと、学生は作品の背景画について、「背景が素晴らしく、アニメーションのような不思議な世界観を味わえた」と述べている。従来であれば、“The background was wonderful. It is like contemporary animation.” といったような表現で終わっていたであろう。しかし、実際の英文では、「不可思議な世界観を作り出す」という内容にまとめた。事実、日本語の感想の他の部分で示しているとおりの「不可思議な世界観」は背景画だけでなく、その他のいくつかの「非現実的な要素」によっても生み出されていると学生自身が捉えていることがわかる。つまり、「不可思議な世界観」は、作品全体に通じることのできる解釈であることを導き出している。これは、学生が自分ひとりの印象にとどまるのではなく、「当時の観客」の立場になって考え、この「不可思議な世界観」が当時の人々にも共有された作品の力であることを理解していることからわかる。現在の視点を離れずに、製作された時代の人々や社会を考慮することは、初期の映画への理解を深める大切な要素であり、学生は現在の感想からさらに自身の考えを掘り下げていくための過程を経ているとも考えられる。このように、一見すると、学生の作った英文は、日本語で書き出した中から 1 文を選び出し直訳しているように見えるが、決して日本語から英語への直訳ではなく、学生が日本語で考えた内容全体を、英語の 1 文に反映させていると考えていいだろう。したがって、学生 e. への添削は、英文法の誤りの指摘に加えて、トピック・センテンスとして成立させるために、“Trip to the Moon” makes an enigmatic interpretation of the world.”、もしくは、“Trip to the Moon” gives an enigmatic interpretation of the world to the audience.” と言っていいことを伝えた。さらに、パラグラフ・ライティングとして発展させるために、サポーターティブ・センテンスとなる理由の部分として、背景画などの技術的な特徴を具体的に挙げることを加えた。

また、最初の段階として、英語の単文における文の構文や基本動詞の使い方を習得することで、よりの確な英文によって自分の考えを表現することができるようになると考えられる。初めの段階では、次のような英文を作る学生が顕著に見られた。

学生 f. The movie is good rhythm.

学生 g. This movie is not sound.

上記の場合、「主語+be 動詞+補語」、もしくは、「主語+動詞+目的語」の使い方が習得されていない。そのため、とくに「主語+動詞+目的語」の構文に焦点をあてた学習を行った。具体的には、基本動詞 have を取り上げ、日本語の「持つ」という意味が必ずしも have のそれに共通するものではないことを、クイズや英作文を取り入れながら指導した。たとえば、以下のようにである。

クイズ1. 次の英文は、正しい使い方かな？

I am having a pen. 「私はペンを持っている。」

ここでは、動詞 have が基本として「持っている」という動作を表すよりも「所有」を意味することや、「持っている」と表現したい場合は I am holding a pen. が適切であることを解説した。「所有」という概念については、I have a sister. や I have a dog. が、決してお姉さんや犬を「抱えている」状態を表す文ではないことを説明した。さらに、「日本には梅雨があります。」という意味の英作文を行うことによって、「～がある」という日本語の意味が There is～. だけでなく、むしろ、「所有」を表す have を使って表現できること、そして最後に、「この映画には音があります。」という英作文を行い、This movie has sound. という英文によって表現できることを確認した。このような基本動詞と基本構文の学習の後、学生 g. は次のライティングにおいて、have を使用して以下のような文章を作成した。

学生 g.

【日本語での感想】

（奥行き。『ジャックと豆の木』は、横移動だが、『大列車強盗』は山の奥からこちらへ走って来たり、列車がこちらから奥に発車するなど、奥行きをととても感じた。）

【英語で】

“Jack and the Bean Stalk” has sideway movements.

But “The Great Train Robbery” has depth.

For example, the men are getting out of the forest in the back and coming closer to the front of the space. Also, the train goes from the front to the rear.

I feel depth intensely in this movie.

上記では、とくにサポーターティブ・センテンスとなる「理由」について具体的に描写することを目的として、ふたつの作品を比較してその映像表現上の違いと、その理由について記述することが課題であった。学生 g. は have を使った2つの単文によって、的確に自身のアイデアを表現することができている。



以上が、主要な成果と考えられる。しかしながら、本授業の試みにおいては、成果は同時に課題の発見でもあった。次章では、課題と今後の取り組みについて述べることとする。

#### (5) 課題と今後の取り組み

以下に、本授業における課題を踏まえた改善すべき点を挙げる。

- ① パラグラフ・ライティングを想定した記述を授業の1回目から行うこと。
- ② 最初の段階において、英文は短文で書くこと。

①については、授業の1回目から「何を一番言いたいか」の1文だけでなく、「なぜそう思うのか」を合わせて書き出すように設定するというものである。筆者は、本クラスの学生が、総体的に映像作品に対する洞察力を持っていることを知ったが、同時に、英語の基礎的な力に差も見られたため段階を踏む方が良いと判断し、課題のプリントにおいては、「何を一番言いたいか」のみを日本語のなかから選び出し、英文で書くよう指導していった。この1文を選び出しまとめる過程で、サポーティブ・センテンスにあたる「なぜそう思うのか」という理由をあえて書き出さなくとも認識し分けて考えることができると判断したこともある。そして、個々の添削において、学生のそれぞれの考え方や英語スキルの習得度に合わせて、パラグラフ・ライティングの指導を行った。

確かに、3章で取り上げた学生c.や学生d.などは完全ではないにしろ、よりまとまったパラグラフ・ライティングの形式で自分の考えを述べ、その内容は第三者に理解可能な説得力のあるものになっていった。彼ら以外にも、トピック・センテンスにつづき、サポーティブ・センテンスを積極的に書き、一文では留めず文章を書く学生が確実に増えた。しかしながら、力強いトピック・センテンスを書けるようになった一方で、最終的にわかりやすくサポーティブ・センテンスを記述することが難しい状況が見られた。この問題を解決するために、初めの段階から、パラグラフ・ライティングを想定した文章であることを学生が意識することを目的に、「何を一番言いたいか」と「なぜそう思うのか」とを合わせて考えそれらを書き出すようプリントの設問に明記する必要がある。つまり、必要なフォーマットとして与えることである。その上で、英文を作成する際には個々の学生の英語のスキルに合わせて、段階を経たライティングへの取り組みを指導する必要があるだろう。

この段階を経たライティングの取り組みには、上記②で挙げた「最初の段階では、単文で書くこと」を意識的に行うことが挙げられる。これは、前章で指摘した学生の成果から、英文の基本の構文や基本動詞の習得の大切さに筆者があらためて気づかされたことによる。また、穴埋め式の基本問題においては理解している文法事項も、実際にライティングを行う際に活用することが難しい状況も確認された。そのため、前章で述べたような、

学生の作成した英文を取り上げながら、わかりやすい単文を通して日本語と英語の基本的な文のかたちや単語における意味の違いを具体的に指摘していくことなどは有用と考えられる。そして、適切な接続詞を使用し、単文を重ねてパラグラフ・ライティングを習得することが必要である。

さらには、自由に考えるためには、最初からフォーマットを提示しすぎることに慎重にならなければならないが、学生の力や上映する作品の内容によってなど、状況を考慮しながら適切な枠組みを与えることは必要であろう。たとえば、筆者が同じ授業内容で担当したもうひとつのクラス（月曜日クラス、東キャンパス）で行ったことがある。この学生たちは映像作品を鑑賞し感想を書くことに慣れていなかった。そのため、「自分の最も言いたいこと」を導ききっかけとして、“Trip to the Moon”(映画のタイトル) is [            ].”という文を設定し、interesting, great, amazing, fun, wonderful, marvelous, thrilling などから自分の印象にふさわしい言葉を辞書を使用して選ぶこととした。そうして次に、なぜそう思うのか、作品のどのようなところでそう感じるのかなどを考えていった。東キャンパスの学生たちは、最初はプリントに記載されたこの枠組みを使用していたが、次第に使わなくなり自分の考えを導き出すことができるようになった。

上記①②以外にも、今後の取り組みにおいては次のことに留意したい。学生の添削内容は参考となるものをいくつか選び、最初はOHCにて、途中からプリントにして配布した。しかし、学生へのフィードバックは初めからプリントで共有されなければならない。これは個々の学生が次の課題においてライティングをする際の具体的な参考例となるものであり、その意味においてテキストとなるからである。また、ライティングと添削内容の確認を終えた後、一度だけ難しい内容ではない批評家による英文のテキストを選んで皆で日本語に訳した。多くの学生が積極的に辞書を引いて翻訳に取り組んでいたが、英語での表現や文の構文の解説では、興味深く聞き質問をする学生もいたことが印象的であった。自分のアイデアを英文で表現した後に、専門家がどのように文章で表現しているのかに関心を持ったと考えられる。英作を中心としながらも、同じ題材を「読み取り」という異なる角度からアプローチすることは、英語学習の効果につながったり、それぞれの学生の洞察を深める助けとなったりする。より習得度の高い学生にとっては有用な資料ともなるだろう。

## (6) おわりに

以上が、本大学において試みた映像作品というコンテンツを英語の学習に取り入れた実践の過程とその報告である。

まとめると、映像作品を英語の授業に取り入れる実践は次のように行われ、一定の成果を得た。

**【目標】**

- ・自分の感想を英語で言える。
- ・自分の考えを分かりやすく伝える。

**【内容】**

①基本的な文法事項の学習、②映画作品に関するレクチャー、③映画作品の鑑賞とライティング、④ライティングの添削とクラス内での共有。これら4つの項目を1サイクルとし学期内で繰り返し実践。

**【結果】**

- ・学生の英語レベルにより、最初からどの程度まとまった英文が書けるかに差がある。
- ・全体に、作品をよく見て興味深い考察をしている。

**【成果】**

- ・教員の添削や、添削の共有を通し、トピック・センテンスとして適切にアイデアが提示できるようになった。
- ・文法学習により、基本の構文を把握して文が書けるようになった。

**【教育法上の示唆】**

- ・日本語を先に書かせることが役立つ。（「言いたいこと」があって初めて英作文も成り立つので、それを引き出すため）
- ・学生のレベルに合わせ、ある程度のフォーマット（短文レベルでも、段落構成のレベルでも）を与えた方が役立つ。

事実、本授業においては、英語の習得度に差がある学生が混在しており、具体的に何をとりあげどう教えるべきかについては学生の反応を確かめながらの模索であった。しかし、彼らはそれぞれの専門のフィールドで考えることや表現することを常日頃から実践しており、同じ力を励みとして英語学習に取り組んでいることを筆者は少なからず感じるがあった。感性的なものは論理的な思考の妨げになるものではないという筆者自身の考えに支えられた試みでもあった。同時に、本校においては初めての試みということもあり、筆者の稚拙な指導も認識している。ぜひこの場を借りてアドバイスをいただけることを強く願う。